



862 人目

ピアサポーター

おかぼし めぐみ
岡林 愛美さん(38) 高知市鴨部

添っている。



「ピアサポーター」。特別な資格を持つ人ではなく、がんなどの病気や障害といった自身の経験を基に、同じ境遇の人を「ピア（仲間）」として支える人々だ。もともとは精神保健福祉士として施設で働いていたが、神経難病の多発性硬化症を患って退職。4年前から「ピアサポーター」として活動しており、「病気になったからこそ、できることがある」と難病当事者らの不安に寄り

添っている。「あれ、おかしいな」。最初に体の異変を感じたのは2009年、高知県立大3年生だった。自転車から帰宅する途中、足に力が入らず、ペダルを踏み込めなくなった。歩いていてもふらつき、風呂上がりには強い脱力感が襲われた。ただ、少し休めば治まった。出たは消える症状に不安が募ったが、整形外科を受診しても結果に異状はなかった。

精神保健福祉士の資格を取り、11年に実家がある香川県内のグループホームに就職。その後、同僚から「歩き方がおかしい」と指摘された。大学病院で検査を受けた。手足にしびれやまひが現れる進行性の難病、多発性硬化症と診断された。

嫌悪に陥った。19年に結婚して退職。夫の古里の高知へ移住した。障害者手帳を取得して就職活動をしたが、専門職だった以前とは異なる仕事内容に戸惑い、就職できなかった。身近に同じ立場の人もおらず、孤独を感じる日々。20年にこうち難病相談支援センターを訪ねると、ピアサポーターが相談に乗ってくれた。「今の状況を知ってほしい」「助けて」「って言いたい」「せきを切ったように悩みや不安を吐き出した。ピアサポーターは「分かるよ、つらいよね」と受け止めてくれた。

「私も同じ立場の人の力になれるかもしれない」。国や県の研修を受け、22年から同センターのピアサポーターとして活動を開始した。これまでに3人から相談を受け、寄り添ってきた。

分かるよ 私もだから



「ピアサポーター」の研修会に参加する岡林愛美さん。「病気だけにとらわれずに、今を生きたい」と話す
(高知市九反田の市文化プラザ「かるぼ」と)



県などによると、県内で医療受給者証を交付された難病患者は6604人（3月末時点。毎年約千人が新たに交付を受ける一方、同センターのピアサポーターを受ける人は年間30人にとどまる。登録するピアサポーターも11人と少なく、認知度不足が課題になっている。

岡林さんは今後もピアサポーターを続け、将来は当事者を中心になって障害者の自立や社会参加を支援する団体を立ち上げたいと考えている。

「あなたに私の気持ちは分からんやろ」。グループホームで働いていたころ、利用者から何度もそう言われた。ピアサポーターになった今は「分かる、分かる。私もだから」と言えるようになった。

病気の寛解（症状の消失）と再発を繰り返す。今はトイレや入浴、着替えも一人でできなくなり、支援が必要になった。「壁にぶつかりながら、ありのままの自分を受け入れて前に進みたい」と考えている。

好きな言葉

写真・飯野浩和
文・浜崎達朗

つながる